# 図書だより

〈第18号〉
昭和63年２月29日
呉工業高等専門学校
図書委員会

（最近の話題の本から）

目　　次

〔読書感想文〕
「便所のはなし」（谷　直樹・遠州　敦子）…… ４Ａ　山本　敬司 … 2
「人生論・幸福論」（亀井勝一郎）…… ４Ｅ　山崎　秀紀 … 3
「敦　煌」（井上　靖）…… ３Ｅ　柚崎　忍 … 3
「次郎物語」（下村　湖人）…… ３Ｃ　若松　勝己 … 4
「ハックルベリィ・フィンの冒険」（マーク・トウェン）２Ｍ　中尾　武善 … 5
〔私の読んだ本〕
「悪魔の飽食」（森村　誠一）…… ２Ｅ　藤原　優子 … 6
「天平の甍」（井上　靖）…… ２Ｃ　中田　智之 … 7
「法隆寺を支えた木」（西岡　常一・小原　二郎）…… ２Ａ　高尾喜代美 … 8
「黒い雨」（井伏　鱒二）…… １Ｍ　遠藤　努 … 8
「暗夜行路」（志賀　直哉）…… １Ｅ　馬場　博文 … 9
「人間失格」（太宰　治）…… １Ｃ　福井　正規 … 9
「銀河鉄道の夜」（宮沢　賢治）…… １Ａ　磯貝　和美 … 10
〔郷土の歴史〕
明治の呉 …… 建築学科教官　岡本　二郎 … 11
〔海外だより〕
炎熱の国，フィリピンより …… 機械工学科教官　灘野　宏正 … 12
お知らせ …… 13
〔窯場めぐり〕
山陰の窯場を訪ねて（二）…… 一般科目教官　枡本　紘二 … 14
〔図書館を訪ねて〕
「海上保安大学校図書館」…… 図書係長　土佐　智義 … 16
新着図書案内 …… 17
編集後記 …… 23

# 読書感想文

## 「便所のはなし」

（谷　直樹・遠州 敦子）

４Ａ　山　本　敬　司

以前僕は、桂離宮の模型を造った事があった。その時の事である。模型では外観を重視したので内装はあまり詳しく作らなかったが、図面を見る段階で疑問に思ったことがあった。トイレが見当たらないのである。その時はそれどころではなかったので、すぐにそんな事は忘れてしまったが、今になって思い出してみると、妙に気になってしょうがない。そこで本屋に足を運んで買ったのがこの本である。桂離宮の厠（トイレ）は勿論のこと、トイレにまつわる興味あるテーマが、建築史、住宅史、都市史、住宅計画、住宅問題の視点からおもしろおかしく説明してある。

まずは桂離宮の厠（トイレ）についてである。桂離宮といえば数寄屋造書院として、近世の建築文化を代表するものとして、世界的に有名である。その桂離宮のトイレはというと、これもまた数寄屋建築の極致であったといわれている。桂離宮の御殿には、新御殿の南西の隅と、中書院と新御殿の境目の二箇所にトイレがあった。小便所と大便所の間を低い壁でしきって、前者は板敷、後者は畳敷であった。前者は正面は赤い大板土壁で、上方に障子窓があり、下に木製の朝顔型小便器がある。後者は畳中央に春慶塗という樋筥（大便器）が据えられて、壁紙は黄土地に雲母で五三の小桐紋をあしらったきらびやかな意匠であった。桂離宮では小便は自然吸収式、大便は平安貴族が用いた樋筥が使われていたのである。

ところで水洗便所の歴史を知っている人はいるだろうか。誰もが思うには、水洗便所はヨーロッパで発達し、日本へ文明開化と共に伝わった、と、こんなものだろう。だが実は大昔もあったそうだ。人口の少なかった古代においては、屎尿を川に流すのは当たり前で日本のように水の豊富な風土では水の自浄作用を利用した汚物処理、すなわち、厠の水洗便所が、当時最も便利で安全な選択だったのだろう。少し強引ではあるが、水によって処理する点では「水洗」と言っても過言ではないと思う。考えてみると「水に流す」という諺があるが、これは昔の人が汚れ、すなわち屎尿さえも水に流し去ったことからきているのかもしれない。

先程、水洗便所は大昔から、と書いたが、常識的に考えてみると、水洗トイレ＝便器に落とされた排泄物がその都度水で下水に流され、下水を通って下水処理場に集められて一括して浄化処理される。つまり、水による第一段階の処理と集中施設による第二段階の処理を組み合わせたシステムは、文明開化と共にというから、わずか一世紀足らずという事になる。ではそれまではというと、そうです、汲取便所ということになるだろう。

古代の便所というのは、先程も述べたように川に流していた。その後、平安京の時代になると、都の街頭で老若男女が排便したというから、なんともきたならしい話である。その後、日本に汲取便所が登場するのは鎌倉時代以降といわれている。最近でこそ見られなくなったが、人糞は優秀な肥料として畑作にはかかせないものだった。またそれを買い、米と金を支払うという、科学肥料が普及する現代では考えられないことである。

現代は「トイレ革命」の第二段階に達しているといわれる。第一次は和式から洋式への移行。第二はお尻を洗う便座の普及である。しかし、あまりにも機能優先に走りすぎ、トイレの文化的側面がなおざりにされているという指摘もある。欧米諸国からみると、日本の住宅は「うさぎ小屋」だ、ということを聞いたことがある。質的に貧困な日本の住宅事情を象徴する「うさぎ小屋」の現代住宅にあって、最も小さくきりつめれられた空間がトイレではないだろうか。それは、トイレが排泄という単一の行為にのみ対応する、シンプルな空間であることに由来する。

今ではトイレの中を好む人は意外に多いと聞く。こうしたニーズを反映してか最近の住宅雑誌を見ると、書棚を設けたり、障子を入れて床の間風に仕上げたりと、従来のトイレとは違った新しいタイプのトイレが

登場しはじめている。トイレは現代人に残された最後の個室になったといっても過言ではない。

ではこれからのトイレはどう変化していくのだろう。現代人は洋式水洗トイレをどう思っているだろう。座る姿勢は楽になり、臭気もさほど気にならず、なによりも清潔な理想のトイレだと思い込んでいるのではないだろうか。昨年の夏は、関東地方では梅雨による雨量が例年になく少量であった為、台所、風呂はおろかトイレの水にまで節水をするという有様である。水洗トイレは豊富で安い水が大前提でなければならないが、これでは多くの人々が不安を感じ始めるのも時間の問題である。近年少量の水で洗える省エネ型水洗トイレや、排泄物をその場で水分を取り去り、臭気をなくして処理するというドライ・クロゼット（DC）方式が注目されている。自分達がこれから建物の設計をしていく上でトイレに対する重要性が高くなっていく事は間違いないだろう。

## 「人生論・幸福論」

（亀　井　勝一郎）

4M　山　崎　秀　紀

この本は、亀井勝一郎氏の人生論について抜粋しています。氏の人生論を一口に言えば氏自身が生きてきた人生の途上に得たさまざまの経験をもとにして、それが語られていることでしょう。人生論とは、多かれ少なかれそのような性格を帯びてきざるをえませんが氏にあっては、未曾有の変革の時代をもっとも激しく生きてきたという、その珍しい経験が何よりも物を言っているのだと思います。

亀井氏は、1907年(明治40年)生まれで大正デモクラシー、第2次世界大戦、敗戦、高度成長期という多彩な時代を生きてきました。やはり僕たちには体験できないものがあるのです。しかし、このような時代に氏は、何時も時代の先端に立って、常に自分を非常時におき危機に身を支えて精神の緊張を保ってきました。そこに氏の希望した生の軌跡を見事に描き出していることに感動しました。

〝一切は空だ〟この台詞は本書のものでありますがしかも極々一部でありますが、氏の人生論のすべてがここから始まっていると思います。読んだとおり、全ては空であるという意味ですが、ここでは〝一切を棄てよ〟という意味があるのだと思います。すなわち〝捨身〟です。仏門を求めたり悩み苦しむ人たちを救ったりするために自分の身を投げ出すことです。ここに明らかに氏の希望した生の軌跡を感じました。

最後に、この本は解釈しようとしてもどうしても解釈しきれない、どんなに説明しようとしても不可能な、ある微妙性に常に直面せざるをえないような言葉ばかりでした。しかし、何度も説明し解釈してみても満足出来ない言葉に直面することで、自己を鍛えることができたと思います。

## 「敦　　煌」

（井　上　　靖）

3E　柚　崎　　忍

『敦煌』を読んで一番感じたことは、話の軸になる三人、趙行徳、朱王礼、尉遲光の生き方が本当に対照的に描かれていることである。

その中でも最も自分が強くひかれるのが尉遲光の生き方である。隊商の隊長に身を落としながらもかつて王族だった誇りを忘れず、時には悪どい事をしながらも、戦乱の世に大胆にかつしたたかに生きていくさまが何か気持ちよく思われた。ただ最後、沙州の曹賢順の城が燃え落ちるのに乗じて仲間の駝夫達を殺したのはひどいと思った。これも自分一人しか信じられるものはないといったこの人なりの生き方なのだろう。

この話の中で一応主人公として書かれている行徳は、何か話の傍観者となっているようであまり面白味はなかった。この人物で印象に残っているのは進士試験に失敗してもやたら立ち直りが早いなあと思ったことと、回鶻王族の女性の思い出をいつまでも持ちながら生きているということである。何があっても決して彼女の首飾りを手放そうとしなかったことが彼なりの愛情表現でもあり、供養だったのだろうと思う。全体的に血なまぐさい戦争が主体なだけに、ここらへんはえらくメロドラマ的だなあと思う。

朱王礼はコチコチの軍人という雰囲気で書かれているが、一番この時代に純粋に生き、自分の感情をおさえた人なのだと思う。最後の最後に怒りを爆発させ、自分の大将であり、最愛の女性を奪った李元昊を殺す

ために無謀な戦いをしに行くのは行徳とはまたちがう、彼の愛情表現なのだろう。その意味でも朱王礼が一番人間らしい感情をさらけ出せたのは、行徳が興慶へ行っている間、彼女の世話をしている時だったのではないかと思う。そして彼も行徳と同じように彼女の思い出の中に生きた一人なのである。

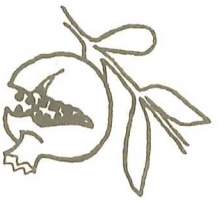
趙行徳、朱王礼という二人の男に愛された王族の女性は、この小説の中で唯一といってもいいほどの女性の登場人物である。この人一人でこの話に色をつけているといってもいい。

すでに男尊女卑があったのかどうか知らないが、自分の運命を全く男性にゆだねてしまっているのが少しはがゆく感じられた。家の者と別れ、一人で残ったわけを行徳に話すとき「私は自分の夫となるべき若者は合戦で討死してしまったと信じている。そしてその若者の霊が自分のかわりにお前を私のところへ差し向けたのだ。」と言っているが、神がかりを通りこしてついていけない考え方だなあと思った。あの時代の女性の考えならば仕方のない事だけれども。その後、李元昊の妾となったのを行徳に見つかり、その後自殺してしまう。設定としてはロマンチックなものがあるのかも知れないが、あまりにも男の身勝手にふりまわされただけというような気がしてならない。

この話は史実を基に書かれているが主な登場人物が架空の人物でもあり、本物の歴史だなあと思うところは最後の十一章ぐらいで堅い時代小説を読んでいるような気がしなかった。

結局のところはあの膨大な経巻は誰が何のためにあのように隠したかは神のみぞ知るところだがあそこまでのドラマに仕立てた作者はすごいと思う。

この小説には舞台となった敦煌という町を問わず、さまざまな町がでてくるが、町も人と同じように表情をもっている。栄えようとする町、滅んでゆく町、そしてまた新しく町ができていくのであろうが、それをただの変化としか受けとめないところに、俗にいう「中国四千年の歴史」が息づいているのだと思う。



## 「次郎物語」

（下　村　湖　人）

３Ｃ　若　松　勝　己

私がこれまで読んだ本の中にこれほどの強い感銘を受けた本は二冊しかない。一冊は、井伏鱒二の『黒い雨』。もう一冊がこの下村湖人の『次郎物語』である。『黒い雨』は本題ではないのでここでは省略する。さて、どうしてこれほどまでの感銘を受けたかというと、それは次郎の思想の変わりかたや、朝倉先生や、俊亮のやさしさまた人間らしさなどですが、これはこの物語の壮大なスケールの中の大半をしめているといっても過言ではないと思います。最初、次郎という人間は母親の愛を知らずに育てられましたが、これは幼い時に母親からはなれて乳母のもとで生活していたので当然と思われますが、それにしても次郎はこのころ妙にひねくれていたのではないかと思います。後に彼はこのことを後悔して反省していますが、私はこの反省するということがいかに大切であるかということを痛感いたしました。彼がもし俊亮という父親にめぐりあわなかったなら、彼は全然違う思想の持ち方をしていたかもしれないと思う。それは、次郎が乳母に次いで真の愛情を感じた一人で、その人間性の豊かさ、大きさは家族の誰よりも優れていたからです。次郎が小学校、中学校に進むにつれ今までやってきたこと、つまり「人から愛されたい」と思っていたことが「人を愛せるような人間になろう」という考えに変わっていったことは、誰にでもあることだと思いますが、これを悟って実行に移し、それが実になるまでにどれほどの長い歳月を費やすかということを、今の多くの人は考えてもみないし、考えてみたこともないであろう。私もその一人であったが、この本を読んでみて、改めて考えさせられました。

この本の中で出てくる、「無計画の計画」という哲学じみた言語がありますが、私は、これはソクラテスの言った「無知の知」と、いうことと同じではないかと考えます。それは、計画がないのだから計画を立てる必要はない。ということだと思うが、しかし、考えようによっては、無計画ということ自体が計画になっているのではないかという矛盾みたいなことも考えられ

ます。これは次郎にとっても、私にとっても、まだまだ考える必要があるし、こういうことを考えることによってより一層、思想の幅がでてくると思う。

ところで、この次郎物語の時代は日本が次第に軍国主義になってゆくという時代であったので、軍国主義に反対する発言を少しでもすると問題となり、この物語でいえば朝倉先生がそういう発言をしたため学校を辞めなければならなかったこととか、後に朝倉先生が塾を開いたときの周りからの圧力などがあげられますが、こういうことが本当にあったのかと思われるような平和な世界に現在はなっていますが、こういう思想には二度となってはならないし、またさせてはならないと思う。このような考え方によって自尊心や自己の発達がさまたげられ、型にはまったような人間しかつくれなくなり、これが結局のところ、ただ、どんな命令でも一点の曇りなく遂行するという、考えてみれば非常に恐ろしい人間をつくりだすことになるのではないだろうか。このような考え方に反対したのが次郎であって、権力の不正に対する彼の怒りはすごく、朝倉先生が開いた塾が権力の圧力によって閉塾しなければならなかったときなどに、断固としてその権力に立ち向かおうとしたところはひどく心に残っているし、その勇気を私も見習わなければと心打たれました。最後に、この小説は著者が十八年もの歳月をかけて書いたものであると知ったとき、著者がいかにその戦乱の時代の中でごくわずかではあるけれども、権力にまっこうから立ちむかっていく勇気を持つものがいたんだということを、切に切にみなに知ってもらうために書いたものではないかと私は思う。

## 「ハックルベリィ・フィンの冒険」

（マーク・トウエン）

2M　中　尾　武　善

この本の主人公は、あの有名な「トム・ソーヤー」の親友である「ハックルベリィ・フィン」である。もともと宿無しである、わんぱくなハックルベリィの行動を、おもしろおかしく書いたのがこの本である。又、この本の中には、たくさんのあらゆるユーモアが含まれている。

とにかくこの本は、少しでも読むと、「この後は、何をしでかすのかなあ」という気になり、ついつい最後まで読んでしまう。事実この僕もその一人である。又、この本を読んでいると、自分も彼らと共に行動をとりたくなってしまう。大きなミシシッピ川へ行きたくなってしまう。それぐらいに表現が豊かだ。

先にも書いたが、なぜかこの本は読む者をひきつける。その理由の一つに、この本に書かれていること、すなわちハックルベリィ達の行動に、とても夢があるのである。本気で盗賊団になってみたり、逃亡してみたり、難破船の中で生活してみたり。僕なんか、この歳になった今でも、この本のような生活をしてみたい。どこかに逃避行してみたいという、大きな衝動にかられるのである。

又、この本は、現代社会への批判が含まれていると思う。なぜなら、まずこの主人公である。ハックルベリィ、又、その大の親友であるトム・ソーヤーは、ほんとに何をしでかすかわからないわんぱく者である。学校へは行かない。家を出る。すぐにけんかをする。また彼らの仲間の中に、トミー・バーンズというのがいる。こいつは、くそまじめではないが、親のいわれる事は絶対ちゃんとするといったタイプである。何か一大事があると、トム・ソーヤーやハックルベリィは困りもするが、行動力で、自力で何とか解決する。しかしトミー・バーンズはと言えば、ただ指をくわえて、おろおろとするだけである。このトミー・バーンズが、いわゆる「現代っ子」ではないかと思う。ひょろひょろした温室育ちで、一人では何もできず、大事なときには何もできない。こういう「現代っ子」をつくってしまう現代社会がよくない、と言っているような気がするのである。

とにかく、この本は子供から大人まで楽しめる本だと僕は思う。

# 私の読んだ本

## 「悪魔の飽食」

（森　村　誠　一）

2E　藤　原　優　子

私が初めてこの本を知ったのは、小学校2年か3年のときでした。その時は単なるミステリーかなんかだと思っていましたが、今回改めてこの本を選んだのは、サブタイトルに「日本細菌戦部隊の恐怖の実像」とあったからです。初めは単なる好奇心からこの本を読みはじめたのですが、読んでいくうちに、鳥肌がたってくるのと同時に、こわいものみたさで夢中になってしまいました。ページをめくるたびに明らかにされてゆく旧日本軍の残虐さが、私を夢中にさせたのです。戦争中それも第2次世界大戦でよく話題になることといえば、ドイツナチス軍によるユダヤ人虐殺、そして世界で初めて落とされた原爆のこと、特に原爆については、日本はとかく被害者として強調されますが、この本をよんでみると、それはとんでもないことと知りました。

たしかに原爆によって日本、とくに広島、長崎は多大な犠牲者をだしました。しかし旧日本軍、この本の題材となっている七三一部隊の行った細菌実験でも、数は及ばないながらも、その残酷さでは原爆となんらかわりはありません。初期こそは反逆者としてとらえられた人のみでしたが、中期、末期には何の罪もない中国人、ロシヤ人たちを強制収容し、そこでその個人名をはく奪し、代わりに「マルタ」という呼び名と、番号を与えました。この時点ですでに連れてこられた中国人、ロシヤ人たちは人間ではなくただの材木と同様に扱われるのです。収容されて2、3日までは、すばらしい設備の整った部屋に入れられ、特別の食事を与えられますが、それもただ人体実験のデータを正確にするためだけの配慮なのです。そして体力的に回復させたのち、連れだされてつれていかれる先は、地獄そのものでしかなかったのです。二度と生きてでることのできない実験室へとつれこまれ、そこで行われる実験に、骨の髄まで使われるのです。

たとえば人為的にペスト、チフス、赤痢などの生菌をうえつけられ、あるいは飲食物にまぜて食べさせられ、そして部屋に帰されると、あとはどんなに苦しもうがたすけてはもらえず、ただ死を待つのみとなるのです。そこで奇跡的に助かっても、何度も同じ実験に使われるか、どうしようもなくなると凍傷実験にまわされて、やはり地獄を見るのです。凍傷実験ではえ死した指や足がくさりおちることなどは日常茶飯事だったそうです。

そんな非人間的な各種の実験もそうですが、もっと背すじの凍る思いがしたのは、ある隊員の一証言でした。「七三一ではマルタの親から生まれた子供はしょせんマルタでしかないという認識だった…（前後略）」収容されたマルタの中には妊娠していた人もあり、収容所の中で出産することもめずらしくはなかったそうです。そうして母となった女マルタが七三一隊員をみかけるたびに我子だけは助けてほしいと涙ながらに訴えていたそうです。日本に帰ればやはり人の親であろうと思われる隊員でさえ、こんな意識しかなかったのです。そしてほとんどの場合、母子ともに殺されたそうです。

戦争という集団狂気の中にまきこまれてしまうと、もうどうしようもないのでしょうか。人間の心さえも失ってしまうのでしょうか。この本の中にかかれている残虐な内容は、決して読んでいて楽しいものではありません。できるものなら闇にほうむりさってしまいたい、忌まわしい記憶ばかりです。しかし目をふさいではいけないと思います。耳をふさいではいけないと思います。被害者としての日本ではなく、加害者としての日本を知り、もう二度とくり返されてはいけないんだという意識をもつべきだと思います。そういう意味でもっともっとたくさんの人にこの本をよんでほしいです。そしてこの世の中から戦争、核兵器という大きな悪をなくすための原動力としてほしいと思います。

ちょうどこの感想文をかくころが、原爆記念日、終戦記念日のころと重なり、より深く戦争について考えさせられました。

七三一部隊の行った人体実験について、書きたいことはまだまだありますが、このくらいでやめにします。いくら書いても今の私のこの気持ちを言いあらわすことはできそうもありませんから……。

最後に、人体実験の犠牲となった人々への祈りをささげて、この感想文をおわりにします。

## 「天平の甍」

（井上　靖）

2C　中田智之

「天平の甍」は、名僧鑒真来日という、日本文化の歴史上欠かすことのできない大きな事実の裏に散った、五人の留学僧の運命を描き出したものである。この鑒真が奈良に南都唐招提寺を開いたという事は、あまりにも有名である。が、その背後に散った五人の名もなき僧たちの事を知る人は少ないだろう。ここで一つ僕は、どんな事をする時でも主役がいれば必ずその裏には、見えない所でそれを助ける人がいる事を教えられた。

ここで五人の僧たちを紹介しよう。五人は名前を業行・戒融・玄朗・普照・栄叡といい、業行を除く四人は多治比広成を大使とする天平五年、第九次派遣唐船で入唐した。これは、第八次遣唐船で阿倍仲麻呂・吉備真備・玄肪等が唐に渡ってから十五年後のことである。この四人の僧たちは洛陽で偶然にも帰国しようとする彼等とすれ違う。このように歴史上の大きな事実が非常に感動的場面である。また彼らの対照的な運命が皮肉なものだ。この留学僧四人の中には、仲麻呂・真備・玄肪等のように歴史上に名を留めた者は一人としていない。宿命というのだろうか。しかし、業行も含めて五人の無名僧達の姿は、それぞれ個性的かつ鮮やかに書かれている。ここで五人の僧達の事を取り上げてみると、まず業行。ひたすら日本へ持ち帰る経文を写経する事だけに、専念し、帰路、経文とともに海に消えた。自分はいくら勉強してもたいした事はないと見切りをつけ、経文だけを日本へ持ち帰るという確実な方法を選んだ。自分を限定する事により、自分の歴史的使命を果たそうとした。感心する限りだ。

次に戒融。彼は性狷介で、唐土で経典を学ぶだけというような方法は選ばず、国中を歩き回ることにした。彼にとって唐土そのものがつきとめるべき謎であったからだ。しかし彼の行動を誰も無謀な事だといえる人はいないだろう。誰も皆、彼のように生きようとする自分の意志を貫き、疑問に対して正面から堂々と立ち向かって行くということは、勇気を必要とすることだからだ。

次に玄朗。彼は留学前から弱音をはいていた。着いてからも、日本に対する郷愁を捨てることができず、日本でなければ、本当に生きるといった生き方はできないといった風だった。まるで僕自身の事を言われているようだった。でも玄朗のこの考えは一変し唐の女性と結婚し、一生唐に落ち着くことになった。でも僕は意志薄弱だとは思わない。航海はとても困難で生きて帰れるかどうかわからない。いくら知識を身につけても、それが生かせるかどうかわからない。そういう状況に置かれても使命を遂行するということは、少なくとも私には玄朗と同じように、できないだろう。最後に鑒真来日という大偉業を実際に成しえた普照と、鑒真来日を熱望し、その途中で果てた栄叡の二人の僧である。鑒真を招くことに関して栄叡ほどの情熱も行動力も持たず、その熱意にひきずられていただけだった普照が結局最後には、鑒真を伴って日本へ帰ることに成功したのだった。業行のように一生を賭けて写経したわけでもなく、戒融のような目標もなく、玄朗のような愛国心もなく、栄叡のような熱意も行動力もなった。もっとも平凡で、必ずしも意志薄弱でもない。一番自分の運命に逆らうことのなかった普照が鑒真来日を実現したのだ。

このような所から作者はこの普照を主人公にしたのではないかと思う。いずれにしろ、この五人の僧たちはそれぞれ違った運命をたどっていく事になるが、結局は自分自身の運命を貫いて、一筋に生きた姿がひしひしと伝わってくる。彼らの背後にある鑒真という大きな存在はこの五人の僧たちの姿全体ではないだろうか。鑒真という大きな存在を歴史上に残し、歴史の流れに消え去ったのが彼らである。

## 「法隆寺を支えた木」

（西岡 常一・小原 二郎）

2A　高　尾　喜代美

この本は、昭和の最後の宮大工といわれ、長年法隆寺の修復に携わってこられた西岡常一氏の話に、小原二郎氏の解説を付け加えたものです。

Ⅰでは、西岡氏の体験記のような形で書かれてあります。西岡氏は自分を、法隆寺千三百年の間で各時代の建物を、自分の目と手で確かめて、各建物の技法を体得できた工人と思い「一番の幸せ者」と思っています。なるほど、いくら大工の仕事に興味を持っていても、そして大工になる良い環境を得たとしても、西岡氏のように年代もちがう古い建物にめぐり会い、解体工事をすることができたという人はいないでしょう。しかし「一番の幸せ者」にも数々の苦労があり、その苦労もまじえて法隆寺にまつわるエピソードも書かれてあります。

ⅡからⅤまでには、木の評価・構造・針葉樹と広葉樹、あて、木の強さの秘密、木目の履歴、木の分布と資源などなど、私達木を最も愛する民族とわれる日本人の一番身近な木について、その神秘的なものが実験のデータなどをまじえてくわしく書かれてあります。ここでは、私達建築の専門教科で習ったことも少し出てきます。特にⅣの「木は生きている」では、法隆寺材と他のいろいろな材とを比べた試験結果が書かれてあり、木のもつ強度などを知ることができると思います。Ⅴの「ヒノキと日本人」では、私が興味を持っている弥勒像の用材についても述べてあり、文化面や身近な生活の面の変化などからも、日本人の木とのかかわりあいについて書いています。私は、『日本書紀』の説話からも古代から日本人は木の材質をよく知って適材を適所に使い分ける能力を持っていることが分かると書いてあるのを読んで、本当に日本人は木と密接な関係で生活してきたのだなあと思いました。最近はまた、木が見直されてきたそうなので、古代の人達に負けない木の持ち味を出せるようになってほしいです。

Ⅵの「古代における木材の輸送」では、当時の輸送事情・伐採などについて細かく書かれてあります。わが国の木材資源が憂うべき不足の状態で、その不足には量の不足と質の低下という意味があるそうで、その理由も述べられています。

最後のⅦ「ヒノキ考」では、現在のヒノキの状況などが述べられています。

この本は、木に興味のある人、私のように法隆寺に興味のある人が読むのに最もうれしい本だと思います。

## 「黒　い　雨」

（井　伏　鱒　二）

1M　遠　藤　　努

僕がこの本を読んだきっかけは、夏休みにはおもしろい本を読むのもいいけれど、夏休み中には、8月6日、9日という被害にあった日本人はもちろん世界の人々も忘れてはらない日があります。そこで中学校の時によくやった平和学習もかねてこの『黒い雨』を読みました。この本には作者井伏鱒二さんが体験したことや避難している時にまわりの人などに聞いたことが色々詳しく書いてありました。読んでみると「皮膚がくるりとはげている」や「七面鳥のとさかみたいに」などというやけどの表現があり、けがのひどさが想像できた。こういったひどいけがをしていても薬が十分にないので、治るのに随分時間がかかったと思います。また焼けた皮膚の下の神経が強力な熱で麻痺したなどとも書いてあったので、ものすごく強力な熱を原子爆弾は発したと思う。僕たちが今までにやってきた平和学習では、核兵器のことや、原爆で被害にあった人数、空襲にあった地域などの広い範囲での被害のことは学習したけれど、一人一人の苦しみなどについてはあまりやらなかった気がする。しかし、この本では作者のまわりにいた一人一人のけがなどを書いて、被害にあった人はどういう苦労をしたかよくわかった。小さな子供も一生懸命避難していたのが印象深かった。

ここ42年間、小さな戦争や革命のようなことがあったけれども、世界中をまき込むような大きな戦争はありませんでした。あたりまえのことだけど、これは、世界中の人々が世界の平和を望んでいるからだと思います。しかし、核兵器によるアメリカ、ソ連の対立から見て、本当の平和とはいえない。核実験の方も一時は停止していたがまた再開したし、よくわからないが、

最近ではＳＤＩという軍備などから本当の世界の平和はまだまだ遠いという感じを受ける。そしてこの地球上に核兵器などがある限り本当の平和はまだまだ先だと思います。そしてこういった時代だからこそ二度と同じことをくり返さないように平和学習が必要だと思います。そして日本は、被爆国として当然二度と悲惨なことのないように平和憲法も守り、非核三原則を続けなくてはならない義務があると思います。42年間たった今でも被爆の後遺症で苦しんでいる人や、世界平和を望んでいる人たちのすわりこみといった努力もむくわれず、核実験などが行われています。そして、広島、長崎は過去のできごとではなく現在・未来にもいえることで、世界の恒久平和を果たすには核兵器廃絶ということで、これをしなければ、地球はますます地球自滅に近づくことでしょう。

「二度と繰り返してはいけない」と訴えてきた被爆された人々の高齢化が進み、平和を訴える人が少なくなってきた今こそ、僕たちがそれにかわって訴え続けないといけないと思います。

## 「暗夜行路」

（志賀直哉）

1Ｅ　馬場博文

はじめに予想していたものとは違っていた。具体的に言うと、暗い道を何かのために行く話かと思っていた。実際は、主人公の時任謙作の人生が暗い道で、それを通り抜けるまでの話だった。

この作品を選んだ理由は二つある。日本現代文学をあまり読んでいないことと、作品名や著者名をよく聞くことである。

どんな時代かははっきりしなかった。それと主人公が重々しい暗さに包まれている感じだった。性格が神経質で相手の動作一つに敏感に感じるところにもそれが感じられた。その暗く、身勝手な考えを持つ主人公に対して腹の立つ思いだった。本が古く、文字が今と違っていたので読み辛かったが、主人公の性格や行動、周囲の雰囲気が独特なためか、いつの間にか引き込まれてしまった。他に、主人公の心の動きが細かく分かりやすかったことも原因の一つだと思う。それにしても、ああも見事に心の動きを表現できるだろうか。この点で、志賀直哉さんはすごい人だと思った。

話は、序詞を含めて全部で五つに分かれている。内容は、主人公の苦悩の生活を描いたものである。特に印象深かったのが各章に一つ位あった。序詞では、とにかく主人公の家の様子が変だった。常に常に父は冷たいし、母の態度も妙だった。第二で出生の秘密を知って納得したが、同時に、父が声高く笑う序詞の終わりには、ぞっとする思いだった。先に述べた第二の出生の秘密を主人公に兄が告白する部分も印象に残った。告白した方と知った方の苦悩が、読んでいても伝わってきて思わず涙をさそった。

第三では、結婚後に産まれた児が死ぬところだった。こうも話が暗くなると、志賀さんに対して少し反感が生まれた。人生は、こんなにも暗くていいのだろうか。いや、この苦難に堪えてこそ幸せがやって来るのだ、などと一人考えていた。

第四、ここでは主人公が自然に包まれていくところと、最後の幸せになるらしいところが感動ものだった。後で考えると終わり方が良かったと思う。それは、読者に考えてもらうという要素が含まれているからである。

読みはじめは他にすればよかったと思ったが、今はそうは思わない。よかったと思っている。それと、読んでいる途中で、人の顔や住んでいる家のことを考えていた自分に気付いた。古典の授業で習った『徒然草』の「名を聞くより」と同じことだと思ったりもした。

全体的に言えば暗いものだけど、話の内容と文章の構成はすばらしく、読み終えた瞬間何とも言いようのない感動があった。よい作品なので、読んだことのない人は、是非一読してほしいと思う。

## 「人間失格」

（太宰　治）

1Ｃ　福井正規

この作品は太宰治が27歳の時から、自殺する数カ月前の39歳の間に書いた作品である。この「人間失格」という本は、太宰治自身の生いたちを書いたものである。

では次に内容について少し話してみよう。

話は最初の手記より始まり、太宰治は、恥の多い生

涯を送ってきたと話しています。それは、小さい頃、大地主の家で生まれ、温室育ちだったことにも、原因はあるといえます。そのせいか、太宰治は不安・恐怖におそわれ、自分をもっともっと知ってもらおうと道化をはじめました。学校での成績は常にトップでした。

そして第二の手記は、彼が中学校へ入学するところからはじまります。この頃になっても道化をずっと続けていたのですが、それを竹一という男に見破られてしまいます。彼は見破られたことにより、竹一に対して、不安と恐怖がつのります。竹一を手なづけるため、つまり、他の人に知られる事をおそれ、口止めのため、彼はせっせと努力をします。そして道化がワザではないと竹一に証明し、そう思いこませるのでした。そして次に太宰治は竹一だけでなく、女性も手なずける努力をします。治は竹一に絵の才能を認められ、一人で上京します。そこで、掘木という画学生に、酒・煙・淫売婦・左翼思想について知ります。それから数カ月もすると、お金に不自由するようになってきます。そして二人の女性とつき会うようになります。それから二年目の11月に一人の女性（婦人）と情死事件をおこします。そしてつかまるのですが、老巡査のおかげで、起訴猶予となります。ここでも道化が身を助けるのでした。そして父の別荘の渋田（ヒラメ）という男に助けられます。

そして最後の手記です。そこで、助けられたヒラメにいろいろと説教され、ヒラメから逃げるのでした。それからまた女とつき会うのでした。シゲ子という女です。ただ、酒が欲しいという事で、くだらない汚い漫画を書きます。今度はバーでヨシ子という女ともつき会いはじめます。そして酒をやめると約束するのですが、一日足りともガマン出来ず、とうとうアル中となります。薬屋へ行き、奥さんとも仲良くなります。しかし、モルヒネという薬で、モルヒネ中毒となり、ヒラメ・掘木・シゲ子と一緒に、脳病院へ行きます。そしてそこで初めて、自分は人間失格だと思います。張り合い相手の父が死に不幸・幸福ともいえず、27という若さで白髪が増えはじめ、人からは40以上にも見られたといっています。

人間、それぞれ生き方はありますが、最終的に、この太宰治みたいに自分自身「人間失格」とならないため、是非、一度読んでみてはどうでしょうか。

## 「銀河鉄道の夜」

（宮　沢　賢　治）

1A　磯　貝　和　美

遠い昔、古代ギリシャや東洋の人たちは、夜ともなれば大空いっぱいに輝く星を眺めては、神秘的な魅力にとりつかれました。現在、月へロケットが飛び、太陽系の星近くまで宇宙衛星が観測写真を送ってきて、宇宙の神秘なベールは次第に科学の手ではがされようとしています。だからといって月や星へのあこがれが消えることはないでしょう。そして、果てしない宇宙の解明は、まだ遠い未来のことと思われます。

さて、この作品ではジョバンニの生とカムパネルラの死の意味が問われています。

孤独な少年ジョバンニは病気の母をかかえて働かねばならず、もっとも好きな友達のカムパネルラと話す暇もないのですが、ケンタウル祭の晩、宇宙空間を走る銀河鉄道に乗り、広大な星座から星座へ走る間、話し合うことができます。しかし、カムパネルラは友達が川へ落ちたのを救おうとして溺れ死んだのです。乗り合わせる人々もみんな死んでしまった人なのです。つまり、ジョバンニは死後の霊魂の列車へ乗ったのでした。カムパネルラをはじめ、これらの人々のエピソードを通じて、ジョバンニは「ぼくはもうあのさそりのようにほんとうのみんなの幸せのためならば、ぼくのからだなんか百ぺん灼いてもかまわない」と決意します。ふと気付くと、ジョバンニはひとりでした。自分のからだなんか百ぺん灼けてもかまわないと決意したジョバンニは生きており、それを聞いたカムパネルラは死者なのです。

宮沢賢治にとって、星は崇高な理想のあらわれです。賢治作品の主題であるまことの道とは、みんなの幸せの為につくすということでした。彼は、まことの道を追い求め、実行する人でした。ですから、宮沢賢治にとっての星はみんなの幸せのためにつくすことなのです。

人は何の為に生まれ、生きるか。人は何の為に死ぬか。皆の幸せとは具体的に何なのか。その答えを読者に求めているように考えますが、賢治の『農民芸術概論』の中のことば「世界がぜんたい幸福にならないう

ちは個人の幸福はあり得ない」というきびしい精神をもって結論とします。

# 郷土の歴史

## 明治の呉

建築学科教官　岡本二郎

(by T.M.)

呉市の都市形成過程において、明治期は非常に重要な時期にあたる。すなわち、次の三つの事項があげられる。一番目に、明治22年に海軍呉鎮守府が開庁し、それまで瀬戸内の一寒村であった呉浦が、軍港都市に変貌することになる。次に明治35年に、安芸郡和庄町、荘山田村、宮原村、二川町の四町村が合併し、広島県では広島市（明治22年）、尾道市（明治31年）に次いで三番目に市政を敷き、近代都市への体制を整えたこと。三番目に、明治36年に国鉄呉線のうち海田市―呉間が開通したことがあげられる（呉線が全線開通したのは昭和10年のことになる）。

明治期のこれらの三つの事項をみることにしよう。一番目にあげた呉鎮守府開庁は、明治16年の海岸調査に始まり、明治19年の海軍条例・鎮守府官制によって、呉が第二海軍区の鎮守府に定められ、同年建設工事が始まり明治22年の海軍省告示によって呉鎮守府の開庁をみたのである（同時に第一海軍区鎮守府を横須賀、第三海軍区鎮守府を佐世保に置くことが決定される）。ここに呉鎮守府が誕生し、兵器、艦船の建造を担当した呉海軍工廠とともに一大軍事基地に発展していく。戦後、こうした軍用施設は民間に転用され、呉市の産業復興にも重要な役割を果した。

二番目にとりあげた明治35年の呉市制施行は、その年の初めに広島県知事及び安芸郡役所の呼びかけに関係4町村（和庄町、荘山田村、宮原村、吉浦村）の理事者が集まり、一部に反対はあったものの呉市制期成同盟会が結成された。同年4月に安芸郡吉浦村のうち川原石、両城の二地区が二川町として独立し、町村合併の準備が整い、10月1日をもって二川町を合わせた先の4カ町村の合併という形で呉市政を施行した。その後、昭和にはいって3年に安芸郡警固屋町・吉浦町、賀茂郡阿賀町を編入、16年には賀茂郡仁方町・広村を編入し、戦後は昭和37年に安芸郡天応町・昭和村・賀茂郡郷原村を編入して現在の市域を構成している。

三番目の国鉄呉線（海田市―呉間）の開通についてみると、日本で最初に鉄道が敷設されたのは明治5年のことで（新橋―横浜間）、7年に大阪―神戸間が開通した。東海道本線（東京―神戸間）が全線開通したのが明治22年であり、山陽本線が広島まで達したのは27年であった。翌28年頃より民営の呉線建設の動きがあったが実現せず、明治34年官設鉄道の工事が開始され、海田市―呉間が明治36年に完成した。さらに呉―三原間が開通し呉線全線が完成したのは昭和10年のことになる。戦後の昭和45年に呉線電化はなったものの複線化は実現せず、未だに単線のままで運行されている。

参考文献
呉市史　第三巻
〃　第四巻
広島県史　近代Ⅰ
金指正三編著　図説・呉の歴史
金指正三編　ふるさとの想い出写真集・明治大正昭和・呉
くれ―呉市制85周年記念特集号―昭和62年10月
広島県統計年鑑　昭和61年版

# 海外だより

## 炎熱の国，フィリピンより

機械工学科教官　灘　野　宏　正

フィリピン工科大学の総合技術訓練センターに、機械工学科、特に機械要素および伝熱工学の分野における長期専門家として、昭和62年3月24日から1カ年、前記センターのカウンターパートへの技術移転に現在まで取り組んでおり、フィリピンでの我が生活状況の一端を紹介しよう。

**〈総合技術訓練センター〉**は土木、電気と機械の3学科からなり、高専が現有する試験設備と比して同等か、もしくは優れており、これらを活用して、学生や学部教官の教育を行っている。学科の紹介は日本では、機械科が冒頭にくるのが常であるが、外国ではアルファベットの順である。こだわることはないが、永年の習慣で、少なくとも私には違和感を抱く。

各学科には、約10名のカウンターパート（Counter-part：日本の専門家から学生への技術移転を手助けするセンター専任の教官）がおり、各専門分野について、学部学生に教授、卒業研究等の指導を行っている。したがって、私の仕事は先生への教授であり、間接的には、学部学生を教えていることになろう。

大学の教育機関は5カ年であるが、高専と違って2年続けて留年すると退学という厳しいおきてはなく、金がたまって勉学可能となれば、いつでも復学できる。また、その逆もある。驚いたことに、同窓会名簿なんて見当らない。卒業すれば、〝はい、さよなら〟、学校側も卒業生の追跡調査をする意向もない。何とも、心豊かな国柄である。

卒業時には、国家試験があり、これに合格することが(大学により異なるが、合格率は約50%)、最大の関心事で、合格した暁には、エンジニア、即ち、ホワイトカラー族としての身分が確立され、自分自身の手を汚さず、テクニッシャンを使う職場が保障される。したがって、学生は実験や卒業研究の寸暇を惜しんで、問題集とにらめっこ、丁度、日本の大学入試のようで、活用度の少ない知識を詰め込んだ博識家となり、体得した技術、知識に自ずと乏しい工業人となる。これが、フィリピンの工業力の向上を妨げている最大の要因と考える。

写真は同センターの2階にある機械科の専門家オフィスでの、カウンターパートを囲んでの短期専門家の送別会の1コマで、ケーキ、アイスクリーム、コーラ等は、すべて送られる側の負担。締めて、1,200円なり。日本と違って、誕生日、歓送会等、すべてその対

ある送別会の1コマ（左端が筆者）

象者が全会費を負担するといった、なかなか良い習慣である。左端2列目が筆者である。その隣が、今度本校で研修するPrado氏で、頭のきれるなかなかの好青年である。

**〈マンション〉**生活は、狭い公務員宿舎生活に慣らされた人間にとって驚くことばかり。住居はマニラ湾が180度展望できる18階にあり、広さが220m²、寝室は来客用を含めて3部屋。それに、我が高専の狭い教室に匹敵する広さの居間。そこに、ゴーギャンの絵画に出てくるような大柄の原地のメイドと私の2人きり。しかも、ドライバーを雇った王侯貴族の生活。二度とこんな生活はできないと思う。

会話に、タガログ語のナマリが入っており、入居当時は当惑したが、私の広島弁英語に慣らされたせいか、最近では、かなりスムームに耳に入ってくる。

**〈気候〉**は思惑通り。暑くて暑くて、着任当時は36度前後（寒い東京から、4時間後には一気に炎熱の国）、夜間でも32度前後。今年は雨不足で、停電（数時間単位）は日常茶飯事。汗ではなく、油汗がベットリ。電力事情は極めて悪く、過大負荷に応じた電力供給施設の不足が原因で、現在のアキノ政権下でも、電力設備の充実が最大の懸案事項である。先般、フィリピン機械学会の一パネラーとして招聘されたが、特別講演では、〝電力事情とその対策〟が学会会長より行われ、電気学会の間違いではないかと錯覚した。

フィリピンに来て、最初に電話をくれたのが、何と機械工学科1期生、広瀬氏（日産自動車勤務）から。〝先生、わしじゃが、だれかわかるかのー〟、なつかしい広島弁の声に聞き覚えあり。海外で卒業生に会えることは想像もしていなかった。約3カ年、当地に勤務しているという。今後の一層の活躍を祈る。

## お知らせ

### 最近の話題の本について

図書室では去る10月からよく読まれている話題の本を選択して購入しています。下に記した中にあなたの読みたい本はありませんか？

これらの本は、閲覧カウンター前の新着図書コーナーに配置して利用をお待ちしています。

なお、昭和62年10月～63年1月迄の受入図書及び受入予定図書は下記のとおりです。

記

| 書　　名 | 著者名 | 書　　名 | 著者名 |
|---|---|---|---|
| 偉大なるデスリフ | C.D.B.ブライアン | 活字のサーカス | 椎名　誠　※ |
| ペレストロイカ | M.ゴルバチョフ | シベリア追跡 | 〃 |
| スパイ・キャッチャー | ピーター・ライト | 菜の花物語 | 〃　※ |
| ノストラダムスの大予言・日本編 | 五島　勉 | サラダ記念日 | 俵　万智　※ |
| いしいひさいちの経済外論 | いしいひさいち外 | 少年 | ビートたけし |
| コージ苑 | 相原　コージ | 活路 | 真鍋　繁樹 |
| 結婚以前 | 赤川　次郎　※ | 生きる日死ぬ日 | 水上　勉 |
| 三毛猫ホームズの登山列車 | 〃 | ノルウエイの森　上、下 | 村上　春樹　※ |
| マンガ日本経済入門1－3 | 石ノ森　章太郎　※ | 注）※印のついたものは入荷済み、他は発注済みです。 | |

### 春季休業中の図書の利用について

3月10日（木）～4月7日（木）は図書資料整備のため閉室します。春季休業中に図書を利用したい人は、3月9日（水）までに貸出手続きを済ませてください。

なお、春季休業中の貸出は3月1日（火）より、1人5冊以内で受け付けます。それ以前に借りた本は、全て返却しないと借りることができませんので注意してください。

又、5年生は長い間ご苦労さんでした。晴れてご卒業おめでとうございます。しかし、借りた本はきちんと返して卒業してください。

# 窯場めぐり

## 山陰の窯場を訪ねて(二)

一般科目教官　枡本紘二

(by　3M　清水康成)

前号で記した雪舟窯を後にし、もと来た道を引き返してR186に出た。ここより浜田市まで10km余りである。浜田川を右手に見ながらやがて市街地に入り、抜けた所でR９と交差した。直ぐ目の前は青い日本海が開けている。右に曲がって２～３km進んだ辺りであろうか、長い屋根の下に幾つもの土まんじゅうを横に並べた様な大きな登り窯が左手に見えてきた。窯の少し手前に下り坂になった脇道があって、そこを下った突き当たりが尾上(おのうえ)焼の窯元であった。力強さとやさしさの感じられる登り窯の丸味を持った形が、私は好きである。そして登り窯の焚き口から頭を突っ込んで中を見回すのである。下の袋から次の袋へと順々に上の方に移動しながら顔を突っ込んで見るのである。窯の内側の壁面に付着した釉薬に光が反射してキラリと光る暗闇の中に、人にとってなくてはならないもの、私の探し求めているものがあるらしいと思える程に何かしら心が引き付けられるのである。国道を走る車窓から見えて人目につき易いからでもあろうか、この登り窯はしばしば絵の題材にされるそうである。昨日も日曜画家の人が描いていたとのこと。ここの粘土には少し鉄分が含まれて、色釉薬には向いていないらしい。石州瓦の特徴である赤褐色の鉄釉を施した焼物が多く、派手さはないが渋みのある山陰らしさが伺える。中でも来待釉、黒釉、白釉の三色掛け分けの茶の道具は質素で落ち着いていた。

単調な釉薬に反して、様々な造形の焼物が目についた。アワビの形に成形して焼かれた皿、サザエの形の向こう付け、今にも動き出しそうに見える小さなカニのある花瓶など、楽しく可愛らしいものが印象的であった。陶主の螺山(ほらやま)氏、窯場の裏手にある「日本海」と姓の「螺(ほら)」とを意識して結び付けているようである。

ユーモアを感じながらR９を東に進んで行くと、風

光明媚な畳ヶ浦や波子海岸を左手に見る辺りに石見焼直売所がある。車を降りて中に入ると、日用食器の外、傘立て、漬物器、大きな甕などの大型のものが目立つ。石見焼とは浜田、江津、大田を中心とした石見地方の焼物の総称である。島根県の焼物は出雲、松江、安来地方を中心とした出雲焼の二つに分けられる。島根県の人はよく、出雲地方を女性、石見地方を男性にたとえるが、これはまことにうがった見解で、焼物についてもまさしくぴったりと当たっている。石見焼は凍結に強い石州瓦として有名であり、本来は水ガメを主とする大型の物が中心であったので、松平藩の御用窯、民芸陶器の出雲焼に較べるとまさしく男性的である。

そのような事を考えながら運転していると、やがて江津市へと入って来た。陸橋に嘉久志町と書いてある。ここには私を魅了して已まない真っ赤な辰砂釉で有名な嘉久栄焼の窯元がある。案内に従って国道を右に曲がり、３分程行った所に、いわゆる窯場のイメージを持って探すと見つかりにくい一般住宅の中にあった。周りに家が立て込んできて登り窯が焚けなくなり、灯油窯に代えて家屋の中に築かれたからである。

陶主は70歳過ぎても作陶を続けている森脇剛氏である。辰砂の夢を果たせないままに他界した父の志を継ぎ、父子二代を要して完成した辰砂の赤に、作家の執念が燃える炎の色を感じた。辰砂の赤は本来水銀による発色であったが、今では酸化銅や炭酸銅を発色剤として使用し、発色を促進するために少量の酸化錫を混ぜて釉薬としている。銅は還元炎で赤に発色するが、その炎の調整と温度管理が大変難しいとのことである。花筒、花瓶、菓子器、急須、湯呑、茶の道具を展示した二階の部屋は、漢詩の一節に言う二月の花よりも紅なりの如き真っ赤な世界そのものであった。

赤一色の器もよいが、真っ赤な中に一筋の青紫の釉薬が流れ溶けている湯呑が気に入った。数年前個展開催の案内状を頂き、広島のトミタ・ギャラリーに飾られた作品を拝見したが、あの時の湯呑と同じようなコーヒー・セットがあったので、宝物でも発見したような思いで買い求めた。一昨年訪問した時には、東京での個展やら色々と内々の話を聞き、楽しい一時を過ごしたが、後継者のいない話の中に何やら寂しさを感じながら別れた。

江津市役所の手前を右に曲がって山手に向かってしばらく行くと土床（つつとこ）焼の窯元である。老夫婦が仕事をしておられたが、ロクロの技術は県下随一である。陶器にしては薄手で、削り方が非常に丁寧であるので、並べられた作品からは磁器のような気品が漂っていた。お話を聞くと京都で修行されたとのこと。なるほどと思われた。灰釉一筋に続けられ、透明の中に乳白色や青味がかった色に窯変した器に見入っていると、何かしら神秘の世界に引き込まれそうになる。

江津市周辺では後地町に升野窯、秀山窯、嶋田窯がある。Ｒ９をＪＲ浅利駅前交差点の所を右折し、Ｒ９と並行して走る間道を７km程進むと山間（あい）に見えてくる。これら窯元の展示室や前庭には大きな壺や甕、傘立て、庭園セット、飾り皿など石見焼らしい大型陶器が所狭しと並べられていた。中でも嶋田窯の緑、黒、白の三彩の焼物は立派であった。その時に買い求めた

傘立てを、今でも我が家の玄関に置いている。

さらに10km程進むと温泉津(ゆのつ)温泉がある。広島屋という旅館を見つけて嬉しく思いながら温泉街を通り抜け、美しい日本海が見下ろせる高台にある温泉津焼の窯元に到着した。日本海の青さを思わせる森山窯の呉須、つや消しの釉薬にすぐれた椿窯、松渓山窯では貫入の美しさを見せてもらい、温泉津を後にして玉造温泉へと車を走らせた。

# 図書館を訪ねて

## 「海上保安大学校図書館」を訪ねて

図書係長　土　佐　智　義

昨年の暮、春を思わす暖かい陽ざしを浴びた風光明媚な呉湾の一隅に、海上保安大学校を図書主任と図書係の計４名が訪ねた。大部分の大学、短大、高専等が文部省の管轄であるのに対し、海上保安大学校は海上保安庁の下に、海の安全を守る幹部養成機関として昭和26年に設置された。

全寮制の規律ある生活の中で学習し、訓練を重ねて、統率力、協調性等の資質の向上を図りながら、幹部候補生としての自覚を備えていかれる。

この大学校の学生の特徴は、学生であると同時に海上保安庁の職員であることである。従って、月額約10万円の給料を受けながら、大学卒業程度の知識を得ることができる。さらに、ほぼマン・ツー・マンに等しい教育、訓練がなされるので、厳しい訓練を除けば、恵まれた条件の下で充実した学生生活を送ることができる。

学問をする意欲の強い学生は、国立大学を中心に大学院でも給料を受けながら、さらに知識を身に付けることができるそうである。

こうした環境の中で、図書館が学生とどのように関わっておられるかと興味を持ってお訪ねしたが、やはり、学生の読書離れはいずこも同じとのことであった。

しかし、利用者を図書館に引き付ける一環として、昭和62年４月から館長の谷村先生を始め、図書館のスタッフが市販のソフトを使ってバーコード処理による貸出業務の電算化に取り組まれ、業者装備も含めた新しい開架図書約１万冊を入力して、７月から貸出業務の電算処理を開始された。同時に件名、著者名、ＮＤＣ等による検索も可能となった。

蔵書の特徴も、海洋、法律、第２外国語（中国、韓国、ロシア語等）に関する図書に見受けられる。

来年度からは、さらに恵まれた学習環境の整備のため、2,230m²の新館の建築を計画中とのことであった。

残念なことに、大学校の性格からして、本校の学生が利用したい図書は限られてくるし、相互貸借業務も制限されている。せいぜいスポーツ、文化交流などを通じてより一層の規律正しさを見習って頂きたいと思う。

### 図書館の概要

１．蔵書

図書　約71千冊（他に今年度から海上保安協会からの寄託図書が約2,300冊あり）

定期購読雑誌　２２０種

内訳　和　１５０種

洋　７０種

２．主たる利用対象者数

学　生　約　４５０名

（本科　約250名 その他　約200名）

教　官　６０名

# 新着図書案内

（昭和62年８月～12月　受け入れ図書室備付分）

## ＞０　総　　記＜

人工知能のビジネス・トレンド
（H.C.ミシコフ）哲学出版
ＡＩ入門　（矢田光治編）オーム社
人工知能　（今田　俊明）　〃
心をもった機械　（戸田　正直）ダイヤモンド社
マイクロコンピュータ入門　第２版
（森下　　巌）昭晃堂
マイクロコンピュータ応用システム開発技術者試験　初級
（マイコンシステム研究会編）日刊工業新聞社
オペレーティングシステムの概念　上、下　原書第２版
（J.L. ピーターソン等）培風館
画像データベース　（坂内正夫等）昭晃堂
Ｃ言語による３次元コンピュータ・グラフィクス
（安居院猛等）　〃
Dr.Dobb's Toolbook of C
（ＤＤＪ編集部編）工学社
ＦＯＲＴＲＡＮで学ぶ情報処理入門
（鈴木昇等編）オーム社
ＳＭＡＬＴＡＬＫ－80
（Adele Goldberg等）　〃
マウス活用入門　（一柳　　克）技術評論社
N88 BASIC VS MS-FORTRAN
（木戸　能史）オーム社
効果的プログラム開発技法　第２版
（國友　義久）近代科学社
ＭＳ－ＤＯＳの本　（I/O編集部編）工学社
わかりやすい言語ＰＬ／Ｉ（内藤　忠男）オーム社
情報処理演習　ＦＯＲＴＲＡＮ７７
（奈良　久等）培風館
入門ＣＯＢＯＬ　（西村恕彦等）オーム社
いちばんやさしいＣＯＢＯＬ入門
（菅野　　篤）ナツメ社
新プログラミング手法のすすめ
（竹本　篤郎）山海堂
ハイテク・パターン集　（大井　　純）誠文堂新光社
現代用語の基礎知識　１９８８　（自由国民社）
情報・知識　imidas イミダス　１９８８　集英社
日本大百科全書　小学館
17：とけーにほんく
18：にほんけーはな
19：はにーひん
ミクロの世界　東京大学出版会
ロック「市民政府論」を読む
（松下　圭一）岩波書店
新釈漢文大系　明治書院
23：易経　上　（今井宇三郎）
35：孝経　（栗原　圭介）

## ＞１　哲　　学＜

心のモデル　（齋藤　洋典）丸善
中国4000年の超脳思考　（佐藤　宗颯）日貿出版社

## ＞２　歴　　史＜

20世紀全記録 chronik 1900-1986　講談社
国史大辞典　（国史大辞典編集委員会編）吉川弘文館
８：すーたお
江戸わかもの考　（野口　武彦）三省堂
実録昭和史１－７　ぎょうせい
中国の歴史　４－15　（陳　　舜臣）平凡社
清末中国の青年群像　（横山　宏章）三省堂
ガンディーをめぐる青年群像
（内藤　雅雄）　〃
青春のヨーロッパ中世　（堀越　孝一）　〃
古代ローマの若者　（長谷川博隆）　〃
世紀末ドイツの若者　（上山　安敏）　〃
元始、女性は太陽であった　上、下
（平塚らいてう）大月書店
坂本竜馬　（山本　　大）新人物往来社
高杉晋作　（古川　　薫）　〃
徳川家康　（北島　正元）中央公論社
チンギス・ハーン　（岡田　英弘）集英社
漢の武帝　（福島　吉彦）　〃
項羽　（村松　　暎）　〃
洪秀全　（小島　晋治）　〃
三蔵法師　（中野美代子）　〃
諸葛孔明　（林田慎之助）　〃
秦の始皇帝　（吉川　忠夫）　〃
則天武后　（澤田　瑞穂）　〃
曹操　（川合　康三）　〃
楊貴妃　（小尾　郊一）　〃
海外安全ハンドブック　トラベルジャーナル
角川日本地名大辞典
（「角川日本地名大辞典」編纂委員会編）角川書店
１：北海道　上、下

43：熊本県
オフロードツーリング林道日本一周
（寺崎　勉）山　海　堂
3：東京→佐多岬
4：佐多岬→東京
NHK大黄河　（陳　舜臣等）日本放送出版協会
5：大　河　渤　海　に　到　る
コン・ティキ号 探検記（T・ヘイエルダール）筑摩書房

## ＞3　社会科学＜

岩波ブックレット　岩　波　書　店
93：恐怖のアウシュヴィッツ（タデウス・シマンスキ）
94：平和を学ぶゼミナール　（大田　堯等）
95：日本の米　（祖田　修）
96：教育改革の原則（教育問題研究会）
97：戦争と民話　（松谷みよ子）
98：第三世界の都市爆発（久山　純弘）
99：旅しよう東南アジアへ（高嶋　伸欣）
100：フォト・ジャーナリストとは？（吉田ルイ子）
101：武器としての映画　（シゲル・リティン等）
102：軍事大国　日本　（世界編集部編）
103：ネパールの「赤ひげ」タイへ行く（岩村　昇）
日本人と中国人ここが大違い
（中嶋　嶺雄）ネ　ス　コ
文化開国への挑戦　（山崎　正和）中央公論社
日本政治の変遷　（富田　信男）北　樹　出　版
ユダヤ人　（村松　剛）中央公論社
都市の復活
（日本都市問題会議関西会議編）都市文化社
現代国際政治入門　（舛添　要一）PHP研究所
日常法律入門　再版　（外尾健一等）有　斐　閣
要説　法学　（矢野勝久編）法律文化社
江戸の刑罰　（石井　良助）中央公論社
科挙　（宮崎　市定）　〃
憲法マイルド考　（小林直樹等編）北　泉　社
新版　民法概説　（甲斐道太郎等編）有　斐　閣
1：総則・物権
2：債権
3：親族・相続
新版　刑法概説　（平場安治等編）　〃
1：総論
2：各論
動的計画論　（岩本　誠一）九州大学出版会
経済白書　昭和62年版　（経済企画庁編）大蔵省印刷局
マンガ日本経済入門　3（石ノ森章太郎）日本経済新聞社
「大恐慌」　（D.A. シャノン編）中央公論社

OAシステム概論　（倉谷好郎等）オ　ー　ム　社
マンガ株式（必勝）入門　（松本　亨）徳　間　書　店
日本統計年鑑　第37回（総務庁統計局編）日本統計協会
メディアの死と再生　（稲葉三千男）平　凡　社
タウン・ウォッチング
（博報堂生活総合研究所）PHP研究所
診男法　（渡辺和博等）平　凡　社
1983年日本海中部地震震害調査報告書土　木　学　会
教師のためのパソコン活用事例集1
（山賀　弘）技術評論社
Japanese colleges and universities 1987（The Association of International Education）　Maruzen
新時代の高等教育を考える（加藤　寛等）PHP研究所
海外専門学校留学ガイド
（おーJAPAN編）平　凡　社
住まいと匠　（池　浩三）相　模　書　房
住まいの人類学　（大河　直躬）平　凡　社
草柳大蔵の礼儀（マナー）と作法（ルール）　（草柳　大蔵）グ　ラ　フ　社

## ＞4　自然科学＜

岩波理化学辞典　第4版（久保亮五等編）岩　波　書　店
自然のパターン
（ピーター・スティーヴンズ）白　揚　社
理工学文献の特色と利用法（上田修一等）勁　草　書　房
数学的経験　（P. J. デービス等）森　北　出　版
わかる代数学　（秋山武太郎等）日　新　出　版
基礎　線形代数学　（小林巌等編）朝　倉　書　店
微分積分早わかり　（秋山武太郎等）日　新　出　版
基礎　微分積分学　（小林巌等編）朝　倉　書　店
複素関数の微積分　（高見　穎郎）講　談　社
微分方程式早わかり　（春日屋伸昌）日　新　出　版
わかる常微分方程式　（秋山武太郎等）　〃
フーリエ解析　（江沢　洋）講　談　社
例題で学ぶ境界要素法　（矢田　敏夫）森　北　出　版
わかる立体幾何学　（秋山武太郎等）日　新　出　版
図学　（峯村　吉泰）名古屋大学出版会
パソコンが解く確率の謎　（涌井良幸等）誠文堂新光社
現象と行動のなかの統計数理
（竹内　啓）新　曜　社
電子計算機のための数値解析の理論と応用　上、下
（A. ラルストン等）ブレイン図書

マイコンによる有限要素解析　続
（戸川　隼人）培　風　館
光と物質のふしぎな理論
（R.P.ファインマン）岩　波　書　店
量子力学演習　（小出昭一郎等）裳　華　房
量子論の新段階　（町田　茂）丸　善
量子論　（A.I.M.レイ）岩　波　書　店
物理数学演習　（押田勇雄編著）裳　華　房
力学演習　（野上茂吉郎）　〃
流体力学ハンドブック
（日本流体力学会編）丸　善
振動・波動演習　（有山正孝編著）裳　華　房
光学　（石黒　浩三）　〃
光学部品の使い方と留意点　第２版（末田　哲夫）
オプトロニクス社
熱学演習　統計力学　（市村　浩）裳　華　房
パソコン電磁気学　（足立武彦等）朝　倉　書　店
電磁気学演習　（小出昭一郎編著）裳　華　房
超電導最前線　日刊工業新聞社
超伝導材料　（伊原英雄等）東京大学出版会
電子波で見る世界　（外村　彰）丸　善
プラズマ工学　（林　泉）朝　倉　書　店
光・電磁波論　（三好　旦六）培　風　館
低次元電子の不思議　（鹿児島誠一）丸　善
超微粒子とは何か　（川村　清）　〃
衝突する原子　（市川　行和）　〃
量子色力学とは何か　（原　康夫）　〃
トップ・クォークを求めて（吉川　圭二）　〃
陽電子の世界　（大槻　義彦）　〃
陽子はこわれるか　（戸塚　洋二）　〃
理・工新基礎化学　（大学教育研究会）開　成　出　版
理科系学生のための基礎化学　第４版
（長谷川正知等）学術図書出版社
基礎化学　（本田幸一郎編）建　帛　社
基礎教養　化学　新版
（名古屋工業大学化学教室編）学術図書出版社
化学と人間の歴史　（H.M.レスター）朝　倉　書　店
化学　（野口　駿等）建　帛　社
理学工学　基礎化学（大学教育研究会編）開　成　出　版
身のまわりの化学　（下沢　隆等）裳　華　房
解説　基礎化学　（竹清章三郎）　〃
化学の世界　（吉岡甲子郎）　〃
化学構造式は語る　（泉　邦彦）講　談　社
立体化学　（原田　馨等）大日本図書
電気化学　（米山　宏）　〃
実験による化学への招待
（Lee R.Summerlin 等）丸　善
星座と望遠鏡　（前原　英夫）　〃
宇宙法則の謎　（堀　源一郎）　〃

朝日コスモス１９８８年版　朝日新聞社
時空のさざ波　（坪野　公夫）丸　善
星々の宇宙　（桜井　邦朋）共　立　出　版
スター・ウォッチング　（林　完次）東海大学出版会
時間の逆流する世界　（松田卓也等）丸　善
星の来る夜　（L.C.ペルチャー）地　人　書　館
雷放電現象　（竹内　利雄）名古屋大学出版会
植物バイオテクノロジー
（S.H.Mantell 等）オ　ー　ム　社
微生物の分類と同定　上、下　改訂版（長谷川武治編著）
学会出版センター
微生物学　入門編　（R.Y.スタニエ等）培　風　館
微生物学　上、下　（　〃　）　〃
人類学講座　２－８、10－13
（人類学講座編纂委員会編）雄　山　閣　出　版
彼女たちはなぜ拒食や多食に走る（鈴木　裕也）
女子栄養大学出版部
食品化学基礎実験　（神谷　功等）東　京　教　学　社

## ＞5　工　学＜

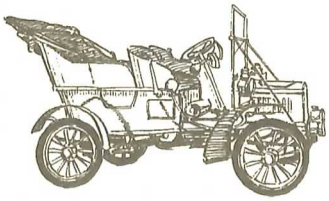
統計工学ハンドブック　（得丸英勝等編）培　風　館
圧力の計測　（計量管理協会編）コ　ロ　ナ　社
センサ　（千原　国宏）　〃
光技術者のための光測定器ガイド（田幸敏治等編）
オプトロニクス社
光計測のニーズとシーズ
（光応用計測技術調査研究委員会編）コ　ロ　ナ　社
工業計測システム入門　（野坂　康雄）東海大学出版会
センサの使い方と回路設計（谷腰　欣司）工　業　調　査　会
計測の科学的基礎　（高田　誠二）コ　ロ　ナ　社
固体力学　（日本機械学会編）オ　ー　ム　社
弾性力学　（小林繁夫等）培　風　館
有限要素法の実際　（R.T. フェナー）サイエンス社
新しい複合材料と先端技術
（植村益次等編）東京化学同人
機能材料入門　上，下　（本間基文等編）ア　グ　ネ
ＣＡＤシステムの機能と構成
（日本機械学会編）技　報　堂　出　版
ＣＡＤ解説　（樋口登志男等）実　教　出　版
工学における設計　（猪瀬　博編）東京大学出版会
パソコンＣＡＤ実践活用法（森岡茂樹等）技　術　評　論　社
パソコンＣＡＤと製図　（富塚知道等）オ　ー　ム　社

ハイテク日本'87　世界文化社
技術士補試験　オーム社
テクニカルライティング　（青柳　忠克）産業図書
BASICシステム工学　（松永　省吾）
東京電機大学出版局
工場が変わる現場が変わる（野口　恒）にっかん書房
新体系土木工学　（土木学会編）技報堂出版
40：橋梁の計画と管理
土圧を受ける構造物の設計（勝沢勝栄等）　〃
土質基礎工法要覧（土木研究センター編）森北出版
交通工学　（河上省吾等）　〃
歴史と伝統にみる橋
（ウィルバー・J・ワトソン等）建設図書
橋梁下部・基礎構造物の設計
（石原重孝等）技報堂出版

ボーモンの卵　（川田　忠樹）建設図書
水資源の保全　（吉良竜夫編）人文書院
インテリジェントシティ　東京の5年後
（長谷川文雄）講談社
東京大改造　（尾島　俊雄）筑摩書房
岐路に立つ都市再開発　（坂和章平等）都市文化社
環境工学辞典
（環境工学辞典編集委員会編）共立出版
水環境工学　（佐藤敦久編著）技報堂出版
空間　（原　広司）岩波書店
長谷川逸子　（SD編集部編）鹿島出版会
今井兼次　絵日誌　昭和16年（今井　兼次）
早稲田大学出版部
槇　文彦　2　（SD編集部編）鹿島出版会
ポスト・モダンの時代と建築
（磯崎　新）　〃
空相の現代建築　（藤井博巳等編）　〃
建築家の休日　（黒沢　隆）丸善
愛の建築譚　（三宅　理一）PARCO出版局
象設計集団　（SD編集部編）鹿島出版会
建築文化再見　（伊藤ていじ）淡交社
2：技法とかたち
3：くらしとかたち
4：庭　三つのかたち
建築様式の歴史と表現　（中川　武）彰国社
建築　（大庭みな子編）淡交社
わが数寄なる桂離宮　（西　和夫）彰国社
ポスト・モダンの座標　（松葉　一清）鹿島出版会
城郭と城下町　小学館
5：近畿
建築のハイテック・スタイル
（SD編集部編）鹿島出版会
A Guide to Japanese architecture.
（The Japan Architect）新建築社
日本の建築家　（日本の建築家編集部）丸善
5：出江　寛　無頼の花
6：安藤　忠雄　挑発する箱
7：毛綱　毅曠　建築の遺伝子
ガウディの建築　（鳥居　徳敏）鹿島出版会
ホモ・ファーベルの建築史（長谷見雄二）都市文化社
実務的騒音対策指針　応用編
（日本建築学会編）技報堂出版
建築のパースペクティブ　（赤谷　吉信）学芸出版社
地下建築物のデザイン手法
（John Carmody等）丸善
建築のかたちと空間をデザインする
（フランシス　D.K.チン）彰国社
DA建築図集・図書館（日本建築家協会編）　〃
コンパクト建築設計資料集成
（　〃　）丸善
建築設計競技　（近江　榮）鹿島出版会
建築計画　1　（岡田光正等）　〃
建築測量　（佐野暢紀等）理工図書
コストプランニングの知識（高橋　照男）鹿島出版会
絵とき建築施工　（杉浦　光義）オーム社
建築のパフォーマンス　（磯崎　新編著）PARCO出版局
複合市民施設　（日本建築家協会編）彰国社
1：庁舎と会館
2：コミュニティセンター
インテリジェントビルの計画　鹿島出版会
インテリジェントビルの道具（ツール）
（福田　遵等）丸善
居間は公園だ　（東　孝光）　〃

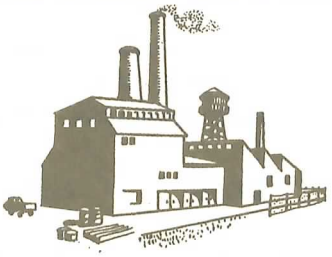
住環境の計画　2
（住環境の計画編集委員会編）彰　国　社
10宅論　（隈　研吾）トーソー出版
工業化住宅・考
（システムズ・ハウジング研究会編）学芸出版社
住まいとほどよくつきあう（宮脇　檀）新　潮　社
森本毅郎　住まい面白発見
（ＴＢＳラジオ編）丸　善
木造住宅のコストプランニング
（高橋　照男）鹿島出版会
二世帯住宅のノウハウ　（吉田　桂二）彰　国　社
宮脇檀の住宅設計ノウハウ
（宮脇檀建築研究室）丸　善
集合住宅の設計要点集　（滝沢健児等編）彰　国　社
都市型集合住宅　（清田　育男）井上書院
不安な高層　安心な高層　（湯川　利和）学芸出版社
環境工学　改訂新版　（板本守正等）朝倉書店
インテリア・ウォッチング（押野見邦英）鹿島出版会
図解　インテリア・コーディネートの基本
（尾上　孝一）井上書院
インテリアコーディネーター試験標準テキスト基礎編
（杉山　泰一）オーム社
パソコンによる機械工学演習
（橋浦正史等）森北出版
機械力学　（日高照晃編）朝倉書店
機械の力学　（吉川孝雄等）コロナ社
ポケコンによる材料力学演習
（神谷紀生等）森北出版
極限に挑む金属材料　（田中良平編）工業調査会
機械機構設計ノート　（大滝　英征）日刊工業新聞社
精密機構　（精密工学会編）オーム社
潤滑ハンドブック　改訂版
（日本潤滑学会編）養賢堂
機械設計工学・製図法　（岩井　実等）産業図書
機械工作学　（機械工作学編集委員会編）　〃
基礎機械工作
（基礎機械工作編集委員会編）　〃
機械製作法　2　（岸　松平等）森北出版
2：切削・切削および工作機械・表面加工
機械工作要論　改訂　（大西久治等）理工学社
新しい穴加工技術　（松岡　甫篁）工業調査会
研削工学　（精密工学会編）オーム社
伝熱工学資料　改訂第4版　日本機械学会
伝熱工学　（谷下　市松）裳華房
大学基礎　流体機械　改訂版
（辻　茂）実教出版
渦巻ポンプ　（豊倉富太郎等）　〃
真空技術入門　（林　義孝）日刊工業新聞社

自動車メカニズム図鑑　（出射　忠明）グランプリ出版



覇者の驕り　上，下（デイビッド・ハルバースタム）
日本放送出版協会
ホンダの勝ち残り生産戦略（山本　行雄）にっかん書房
自動車用セラミックス　（坂野久夫等）山海堂
メカニズム研究図鑑　エンジン編
（出射　忠明）グランプリ出版
電子制御ＡＴ車の構造と整備
（小林　勝）山海堂
電子制御ガソリン噴射　（藤沢英也等）　〃
自動車用気化器の知識と特性
（魚住順蔵等）　〃
カーエレクトロニクス　（志賀　拡等）　〃
原子工学概論　（都甲泰正等）コロナ社
応用超電導　（萩原宏康編著）日刊工業新聞社
電験第2種合格テキスト
（電験問題研究会編）電気書院
1：電気回路の6週間
2：電気理論・測定の6週間
3：火力発電・原子力発電の5週間
4：水力発電・変電の4週間
5：送電・配電の7週間
6：機器・材料の9週間　1　直流機・同期機・誘導機
7：機器・材料の9週間　2　変圧器・サイリスタ・材料
8：電力応用の10週間　1　照明・電熱・電気化学
9：電力応用の10週間　2　電動力応用・電鉄・自動制御
10：電気施設管理・法規の5週間
新方式電験第3種合格Ａ問題・Ｂ問題マスタ講座
〃
1：電気理論　（北島　敬己）
2：発変電所　（金井敬一郎）
3：送配電線　（浅野　清登）
4：機器材料　（佐藤　隆昌）
5：電気応用　（鈴木　政善）
6：電気法規　（吉江　安夫）
現代応用電気数学　（伊賀　健一）オーム社
電子・電気材料工学　（川端昭等編）培風館
電気機器　1－2　（野中作太郎）森北出版
マルチメディア情報通信　（石田　芳等）オーム社
ドキュメント　日本の磁気記録開発
（中川　靖造）ダイヤモンド社
ＭＡＰ入門　（飯村二郎等編）オーム社

パソコン通信遊ガイド　（中村　広幸）　技術評論社
ＲＳ－２３２Ｃ通信ハンドブック　改訂新版
（システムサイエンス研究所）　〃
例解Ｚ８０マイコンのハードとソフト
（倉石源三郎）東京電機大学出版局
わかりやすい光ディスク　オプトロニクス社
知能ロボット入門　（柿倉　正義）工業調査会
フィードバック制御の基礎（片山　徹）朝倉書店
計装システムの基礎と応用（千本資等編）オーム社
マイコン制御とアセンブラ入門
（野澤繁之等）技術評論社
だれにもわかるＺ－８マイコン制御
（杉江日出澄等）培風館
アクチュエータ革命　（高森　年）工業調査会
メカトロニクス入門　（竹田　晴見）昭晃堂
基礎からのディジタルＩＣ（宮本義博等）技術評論社
ディジタル情報回路の基礎（宮本　義博）　〃
レーザの使い方と留意点（大竹　祐吉）オプトロニクス社
海洋施設の計画と設計　（小林　浩）日刊工業新聞社
地図から消された島　（武田　英子）ドメス出版
初級金属学　（北田　正弘）アグネ
形状記憶合金の話　（井口　信洋）　〃
形状記憶合金とその使い方（大阪科学技術センター形状記憶合金用途開発委員会編）　日刊工業新聞社
新制　塑性加工とプレス作業
（福井伸二等）オーム社
粉末冶金概論　（庄司啓一郎等）共立出版
セラミック加工ハンドブック
（今中　治編）日刊工業新聞社
建築家のための塗料の知識（伊丹慶輔等）鹿島出版会



## ＞6　産　業＜

長江　（小出　博）筑地書館
自由時間都市　（ピエール・ラシーヌ）
パンリサーチインスティテュート
21世紀産業・技術総覧
（通産省ハイテクグループ編）オーム社
庭園歴史散歩　（重森　完途）平凡社
冒険遊び場がやってきた！
（羽根木プレーパークの会編）晶文社
水産海洋環境論　（杉本隆成等編）恒星社厚生閣
宅建合格ここがポイント　（上田節夫等）日本実業出版社
ザ　ベスト　オブ　ジャパン　講談社
THE BEST OF JAPAN　Kodansha

## ＞7　芸　術＜

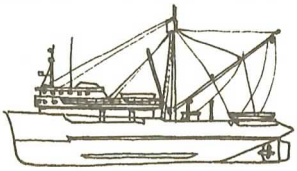
キャラクターイラストレーション
（松下　進）美術出版社
世界のトップ・グラフィックデザイナー68人
（アイデア編集部編）誠文堂新光社
全国書の名蹟めぐり　上，下
（駒井　鵞静）雄山閣出版
写真の歴史　（イアン・ジェフリー）岩波書店
おもしろ空間への招待　（鈴木　悦郎）理工学社
クラシック音楽事典　（塚谷晃弘等編）雄山閣出版
作って遊ぶパソコン・シンセ
（中井佳宏等）森北出版
映画作家　伊丹万作　（冨士田元彦）筑摩書房
バスケットボール指導全書　１－２
（吉井　四郎）大修館書店
マリンスポーツのはなし　１－２　技報堂出版
囲碁つれづれぐさ　（小川　誠子）講談社
将棋かくしふで　（蛸島　彰子）　〃
新社交ダンス教程　（日向　省二）　〃

## ＞8　語　学＜

記号の事典　セレクト版　（江川清等編）三省堂
話はこうしなさい　新訂版（江木　武彦）大和出版
岩波漢語辞典　（山口明穂等編）岩波書店
国際化時代の外来語・略語辞典
（山本慧一編）集英社
日中辞典（北京・対外経済貿易大学等編）小学館

## ＞9　文　学＜

古典を読む　岩波書店
　25：徒然草　（杉本秀太郎）
サラダ記念日　（俵　万智）河出書房新社
結婚以前　（赤川　次郎）角川書店
ノルウェイの森　上，下　（村上　春樹）講談社
菜の花物語　（椎名　誠）集英社
湖水誕生　上，下　（曽野　綾子）中央公論社
ロシアについて　（司馬遼太郎）文藝春秋
人生の流儀　（城山　三郎）文化出版局
完訳　日本の古典　小学館
　7：萬葉集　6
　21：源氏物語　8
　46：謡曲集　1
別巻：古典詞華集　1
昭和文学全集　2，9，12，19，23　〃
葦舟ラー号航海記（T・ヘイエルダール）草思社



**岩波新書**　岩波書店

382：パレスチナ　（広河　隆一）
383：都市の生態学　（沼田　真）
384：中学校は、いま　（望月　一宏）
385：日本の恋歌　（竹西　寛子）
386：子どもの宇宙　（河合　隼雄）
387：試験管のなかの生命　第2版（岡田　節人）
388：仏象の誕生　（高田　修）
389：活字のサーカス　（椎名　誠）
390：大地の微生物世界　（服部　勉）
391：私の見たペレストロイカ（和田　春樹）
392：日本の地下鉄　（和久田康雄）
393：中国人民解放軍　（平松　茂雄）

**岩波ジュニア新書**　岩波書店

131：私は黒人奴隷だった（本田　創造）
132：英語なぞなぞ集　（中村　保男）
133：地球の未来はショッキング！（高榎　堯）
134：空中モグラあらわる（今泉　吉晴）

**カラーブックス**　保育社

726：岡山味どころ　（井上いつのり）
736：日本の鉄道'87　（関　崇博等）
737：ハイウェイ・サービスエリア味の旅（生内　玲子）
738：大阪の電車　（井上　広和等）
739：名物風呂の宿　（野口　冬人）
740：世界の記念コイン　（中村佐伝治）
741：私がみつけた味の温泉（藤嶽　彰英）
742：乾電池手作りおもちゃ（実野　恒久）
743：スポーツ・カー'66～'70　（いのうえ・こーいち）

## 寄贈図書

| 書　名 | 寄贈者 |
|---|---|
| 小説・日本興業銀行2～3 | 株式会社日本興業銀行 |
| 神の国とサタンの国 | 岸　昌 |

## 編集後記

本年度第2号が出来ました。基本的な編集方針は、既に前号の編集時に決めておりましたので、比較的作業はスムースに運ぶことが出来ました。遠くフィリピンより寄稿いただいた灘野先生、ありがとうございました。前号に引き続いて「窯場めぐり」の原稿をお寄せいただいた朴本先生、ご苦労様でした。

これからも、この「図書だより」の内容をより充実させようと思いますので、原稿をお寄せ下さる様お願いいたします。

（岡本記）